

令和５年度 第２回総合教育会議

日時：令和６年３月２９日（金）

於：西宮市役所本庁舎４階

A４４２会議室

開会 午前１１時００分

○事務局　それでは、皆様おそろいになりましたので、ただいまから令和５年度第２回の総合教育会議を開催いたします。開会に先立ちまして、会議の出席者に対し、委員の皆様にお伺いいたします。運営要綱第５条第３項「会議は、副市長、政策局長、教育次長の出席を求めることができる」との規定に基づき、本会議に副市長、政策局長、教育次長が出席することについて、構成員である委員の皆様にお伺いいたします。御異議はございませんでしょうか。

ありがとうございます。

続きまして、会議の傍聴に関して委員の皆様にお伺いいたします。地方教育行政法第１条の４第６項では、総合教育会議は「個人の規律を保つため必要があると認めるとき、または会議の公正が害される恐れがあると認めるとき、その他公益上必要があると認めるとき」を除き、原則公開と定められております。本日の会議につきましては、非公開とする理由のいずれにも該当しないため、本会議を公開することに御異議ございませんでしょうか。

ありがとうございます。

なお、傍聴人が遅れてこられた場合にも、随時入室していただくこととしますので、御了承ください。

それでは、市長、お願いいたします。

○石井市長　それでは、おはようございます。総合教育会議を進めさせていただきます。本日は、令和６年３月３１日をもって退任されます重松教育長より、「これからの未来を考える教育の今後について」というテーマで御講演をいただきたいと思っ

ております。皆さん御承知のように、重松教育長、7年間大変激務を担っていただきました。私も大変教えていただくこと多くございまして、特に歴史ですね、この町の。そうした教育の昔の出来事であるとか、後はその何か一つ事案があった際に、その見えているところだけでない、脈々と流れているそうしたことを御示唆いただいて、もしくはそうしたことに御教授をいただきながら、私も一緒に、私は6年間一緒に仕事をさせていただきました。そういう中から、今回はこうした一区切りを迎えるに当たって、我々に御教授いただけるところ、限られた時間ではありますが、可能な範囲でお聞かせいただきたいというのが今日の趣旨でもございます。そして傍聴来ていただいた人と合わせて、今回はこの重松教育長の話というのは、ここにいるこの空間に我々だけのものではなくて、西宮市の財産として共有したいと思ひまして、オンラインという、こういうウェブで録画もさせていただきながら、これが広く市民にも共有させてもらえればなと思っております。いずれにいたしましても、私からはこの程度といたしまして、そういうようなことで、重松教育長から、「これからの未来を考える ～教育の今後について～」ということで御講演をいただきたいと思ひます。30分程度ということでございますが、流れの中でどうぞ、何て言うんでしょう、思い残すことなくというか、どうぞとにかくお話をよろしくお願ひいたします。

それでは重松教育長、よろしくお願ひいたします。

○重松教育長　それでは、話をさせていただきますけど、たくさんの方がいるんですけど、緊張するんですけども、大学の授業みたいな感じになってしまうかもしれませんが、それはお許しください。話をするのに当たりましては、一応原本として今回文部省のほうで150周年、学制150年っていうのが出てます。その部分と、それから一橋大学が世代間の問題を議論というか、研究する検討会があって、その二つの部分をちょっと使わせていただいております。ですからデータとしてはきちんとしたものですけども、それをしゃべる私がどのくらい理解してしゃべってるのかちょっと怪しいかもしれませんが、話を聞いていただけたらありがたいかなと思つてま

す。最終的にはこれからの教育をどうするか、要するにこれで明治から150年たって、教育は今発展してるわけですけども、それを今後どういうふうにやっていくかということが一番大きなテーマかなと思ってますし、それからこのコロナが始まる前、2020年に教育改革の大改革がなされています。それは戦後の大改革の中でも一番これが大きいんじゃないかということをおっしゃってますけれども、コロナがあったために、いろいろなことがストップはしてませんが、それが十分にできてないという状況があります。それを今後どうするかというのが今からの大きな課題だと思ってます。今回指導要領が2019年に改定されてますけども、今度2027年に改定するというふうに文部省も言ってますので、それに合わせて大きな改革が出てくるのかなと思ってます。ただ学習指導要領は学びのことしか言わないということになってます。ところがさっき言った教育改革のほうは、例えば義務教育学校、義務の学校をどうするか、それから高等学校をどうするか、大学をどうするかという問題と、それから教職員の働き方の問題だとかいうことに、要するにシステム、マネジメントをどうするかという大きな変革がなされています。そういう意味では、今回2024年の改革は大きな改革でしたので、そのことが最終的には出てくるとおっしゃるので、それについて話をさせていただきます。

まず最初に150年の歴史ですけども、ちょうど明治になって日本の教育は今と昔の寺子屋とかいうものから今の教育になったわけですけども、一番の日本の教育の課題は、大学教育からスタートしてます。大学教育をどう受けさせるか、そのために小学校中学校どうするんだという形になってますので、明治の頃は、義務教育学校は本当に尋常小学校だけの3年間または6年間しか受けてないんです。その後は中学校から先はもう全部試験を受けて行っています。ですから本当に大学まで行ってるというのは非常に少なかったわけです。ただ、日本のそれぞれの都道府県には国立大学は全部あります。必ず1校あるわけです。その中で帝国大学というのがあって、それを中心にやってるわけです。帝国大学も初め五つあったんですけども、途中から二つを得

て七つになってます。

私たち教育に関わってですけども、帝国大学があるところには極端に言えば教師を養成する教育学部はありません。そうするとどうするかというと、教師を養成する教育学部は別なところで作っているわけです。帝国大学の教育学部は、教育をどうするかということを考えているところであり、教育の指導方法などを考えるところであって、実際に授業をどうするかというのは、それぞれの大学の教育学部で先生を育成することによってやってるわけです。ですからその意味では、それぞれの帝国大学を見たら、例えば福岡ですと、九州大学があつたら、そこには福岡教育大学あるし、大阪大学には大阪教育大学があるし、東京には学芸大学という形で必ず別に教員を養成する大学があります。帝国大学以外の国立大学は教育学部が大学に入ってますので、そこで先生を養成することになります。ですから私が行ってた熊本大学には教師を養成する教育学部あって、そこで先生を養成しているという形をやってるわけです。そういう意味で、日本の教育は大学教育の在り方からきてます。ですから、教育改革が行われる場合、必ず大学がどう変わるんか。大学ができてないことについて下へ下へおりてくるわけです。ですから今回の教育改革のときに言われた、主体的・対話的で深い学びなんかでも、本当は大学がやるべきはずだったんです。それが逆転して行って小学校の方に下りて行って、小学校のほうが先にやっちゃってしまってるという状況があります。ですから、大学はどうしても講義を受けて話を聞いてとなるとそれじゃおかしいでしょって言うわけです。だからアメリカなんかでも、大学の進学率は90%あります。90%超えてます。世界で一番多いのは韓国が99%ですから、その次がアメリカで、日本はかなり下のほうです。それでも、アメリカなんかは、卒業するのは70%ぐらいしか卒業できないんですよ。日本は入ったら比較的やさしく、みな卒業できます。その意味では大きく変わっていく必要が今言われています。これからどうするかということがあるのではないか、ということかなと思ってます。その中で言われるのは、先ほど言った学制150年の文部省の中で言われたのは、教育が著しい量的

な拡大から今度は質的なものに変わっていかなければいけないということを言われています。そのことによって学校が、ただ教えるとかそういうことばかりやってきたので、不登校だとか、ああいう問題が起こっているし、また生徒たちの学習意欲が非常に低下しているという問題が起こっています。さらに、家庭や地域の教育力が弱体化しているということがあります。それからもう一つ言われているのは、今までだったら学歴が中心でしたけども、今は単純に学歴社会ではなくなっています。これからはいろんな意味で自分たちが主体的に考えてやっていかなきゃいけない、そういう時代になってるんだということが言われています。もう一つは均質的、同じなんだという意識がなくなってきました。いろんなことが変わってきています。ですから就職でも入ったらその会社ですっとじゃなくて、今後はもう4、5年したら次のところへ次のところへというふうになっていきます。それだけの能力があれば給料がどんどんどんどん高いところ上がっていくという形になります。そういう意味で多様性というのが非常に求められている時代になっていると言われています。

それから、それ以外に大きな三つの点があります。一つは少子化がめちゃくちゃ進んでしまっているということがあります。ですから一橋大学の資料によると、四つに一応分けてますけども、要するに1945年から60年まで、それから1960年以後、1975年まで。それから1976年から1990年ぐらいまで。あと1990年から現在までとなってますけども、戦後は一つの家庭で大体4.3人ぐらいの子供が生まれてます。それがずっとどんどん減って行って、今は1.3まで減ってきてます。そういう意味で言えば、家庭に子供が一人しかいなかったら、当然人口減っていきますんで、特にこの2年間、コロナの影響も大きいでしょうけど、本当に年間の出生数が70万台になってますんで、一番多かったときは270万いたんですけども、それがそんだけ減ってしまっているという大きな問題があります。それからもう一つは、高校の進学率もずっと上がって行って、最初は10%しかなかったんですけども、最終的にはもう本当に99%近くまで上がっています。99%はもうほとんど1

00に近い。ところがこの2年間、99%だったのが97まで落ちていってます。ということは、高校に行かなくても自分がやりたいことをやったらいいんじゃないかというように考え方が変わってきてます。ですからその意味で、これからの高校のあり方ということで、後から言いますけども、46答申を受けて、今回の答申、さらに新しい2020年の答申なんか出てきてるのは、普通高校をどうするかという問題があります。ただ単に普通高校ではだめでしょう。それぞれの特色を出しなさい。例えば理科系を中心にやるのか、文科系をやるのかともありますし、いやいや、そうじゃなくてももっともっといろんなことをやるんだというのがあるわけです。だからそういう意味で大きく変わってきているというのがあります。それと併せて、次はやっぱりバブルの後の低成長時代。その影響は非常に大きくて、そのことによって、やはり格差社会になってしまっている。それをどうするかというのが大きな問題です。ですから教育分野においても、この後の世代交代のときに言いますけども、親と子供の考え方がもう明らかに違うというような状況になってきてます。ですから、親は親でどうしてもこういうふうになってほしい。でもそれは前の世代の話でしょ、今の世代でそれで対応できるんですかっていうことを子供は思ってるわけです。だからそのあたりのところのギャップがすごく表れているという状況があります。それから3つめは、極端に進んだ情報化時代です。もうこれだけはこんなに進むとは思わなかったぐらい進んでいます。特にこの10年間でAIも出てきてしまって、これからどうなるか。今までですと、コンピュータを人間が使うということだったんですけど、これからはコンピュータに使われるんじゃないかと。だから産業革命のときは機械を使って人間の労働力の代わりをしてたわけですから、人間自身がやっぱり動かしていたわけなんで問題なかったわけですけども、今度のコンピュータが出てきたことによって、人間の力が要らないんじゃないかと。考えるのはAIに考えさせたらいいんじゃないかということが出てくるわけです。ごく一部の人はその中身は分かってるけど、ほとんどの人は分からない。そんな時代がきてるんじゃないかというふうに言われてます。ですか

らこれから先の社会をどうするかということ言ってるわけです。これに関わってジョン・デューイがこんなこと言ってます。「昨日考えて、今日教えれば、子供の未来を奪うことになりますよ。」もうそれだけ変わってきてるんです。要するに、昨日のことを一生懸命教えてもしようがないでしょ。昨日のことは考えなきゃいけないけども、それは新しいことを次から次へと教えるというか、自分で考えさせてものになさなきゃいけないということ言ってるんです。

次に、次の資料を開けてください。

時代の急激な変化で今言われてるVUCAとBANIというのがあります。このVUCAというのが、これからの未来がこういうふうになっていく、変動性で不確実性で複雑性で曖昧性だと。これは1990年にできたものでして、アメリカの軍事用のものが元になって作られたものです。それが産業界に入って、これでこういうふうには、今世の中が変わってきてますよって言ってますけど、これでは今は対応できないというか、さらに今度は先の2020年からは何をやらなきゃいけない。これはただ単に今の状況を言ってるだけじゃなくて、これからのリーダーシップを取るリーダーがこういうことを受けてどうするのかということ考えなさいということ言ってるわけです。これはアメリカのジェームズ・カショウという大学の先生が考えたものですが、この中で言ってることは、ただ単にこういうふうな状況を把握するだけじゃなくて、そのことに対してリーダーシップを取っていろんなことをやっていきなさいよということ言ってるわけです。そのことについて四つ言ってます。

一つは強靱で柔軟な考え方ができるようにということは、いろんな困難に向かい合ったときに、どういうふうで発想してやればいいのかという逆転の発想を、チームのリーダーとして、そういうのをやっていかなきゃいけないってことを一つ言っています。二つめは、いろんなことをやる時にコミュニケーションをお互いにとって、その中の組織は十分に理解をしながらそれをやっていくということが非常に大事だということ言います。学校もそうです。チーム学校というのを国が言ってますけども、

それもそうなんです。一つのこういう事業をやるんならみんなが理解して同じようにやっていかなきゃいけないんで、ある人は、何でやらされてるんやと思ってたら、それは学校全体も動かないわけです。私が最近気になるのは、こんなん言うたら今の学校の先生に怒られますけども、学校としては、授業を教えることについては大学でいろいろやってきてるんです。問題は日本の教育の一番すばらしい面である、つまり学級経営の部分が非常に弱くなってきてるなと感じます。先生と子供のつながりが非常に弱くなっている。確かに多忙で、遊び時間に先生が外に出て一緒に遊ぶことはない。ないというか少ない時代になってるんじゃないかなというふうに思ってます。私が平木小学校に行ってる時なんか、放課後、もう職員会なんかほっとけほっとけて、みんなでサッカーしようぜってやったのを覚えてますけど、今そんなことやらね、お前何しとんやって怒られそうですけれども。そんな時代じゃなくなってきてるというか。ですから逆に言えば、そのことも大事なんですよね。子供たちの様子をずっと見て、ただ見てるだけじゃないんですよね。今日は何となく元気がないよね。そのときに声をかけてやればいいですよ。ただ単に観てるだけでなく、「どうしてんの」って、ちょっと声かけてサポートしていくことによって、子供たちが変わっていくわけなんで、そういうことをしなさいということ言ってるわけです。それからもう一つはシステムの思考と創造性が非常に大事なんだと。与えられたものを与えられたように考えるんじゃなくて、それをどういうふうにすればさらによくなるんだということを考えることが大切だということ言っているわけです。最後にそれを継続的にずっと適用してやっていくという、そういう力がないとだめだということ言ってるわけです。

ちょっと時間があんまりないんでどんどんいきますけれども。そしたら次の資料を開けてください。

そういうふうにしてできたのがこの世代という考え方です。この世代というのはどこでもあるんですけども、日本の場合はもう本当に細かく世代を分けてます。アメリ

カの場合はとかヨーロッパの場合はX世代、Y世代、Z世代というのであって、X世代はアナログ世代、Y世代はアナログとデジタルが入った世代、Z世代はもう今の本当にコンピュータの時代。最近さらにA世代といって、さらにそれをAIも入れて含めてやっているという世代になっています。日本の場合はそうじゃなくて、まず最初に出てきたのが団塊の世代。戦後の子供たちがたくさん生まれて、それが一つのまとまり。だから世代は非常にまとまりがある世代であるというふうに言われています。それともう一つ大きな問題は、さっきもちよつと言った、この世代のところで学生運動があったわけです。東大の入試がなかった。その世代です。ですからまとまりがある。それからアメリカとの安保の問題に反対したのはこの世代なんです。その世代が今度は次のしらせ世代になったのは、それを見ててだめになってしまってしらせ世代になってる。私はちょうどこの中間になるんです。私は高校2年生のときに東大の入試がありませんでした。そのときに高校で、生徒会の役割やってましたんで、1週間ロックアウトした記憶があります。よう1週間ロックアウトさせてくれたなと思ってますけど、その先生たちも、いやあ、おまえたちも一回自分で考えてしっかりやってみいというふうに言われて、1週間ロックアウトした記憶あるんですけども。そのとき東大の入試がなかったんで、東大に行けなかった人は東京工大とかそんなところ行きたんだなとは思いますが。それによって大きく変わるのとは変わって思います。その後、さっき言ったように、学生運動が沈下することによって、今度はしらせ世代になってしまったわけです。ですからもう何にもない、何やってもうまくいかないよ。だから本当におとなしい。自分から意見をはっきり言うということはないという、そういう世代になってます。その後はバブル世代。これをバブルでも好景気になってしまって、就職は何でもいい、物があふれていくという時代になった。それぞれに特徴があって、バブル世代とその次の団塊ジュニア、ミレニアル世代は、今度はバブルが崩壊した後ですんで、要するに質素儉約みたいな感じになってます。ですからもう全く世代が違うわけです。それが10年ぐらのおきに出てきてるわけです。

最後にゆとり世代。このゆとり世代は、平成からゆとり世代というふうに最初は言っていたんですけども、どうも最近はやとり世代が、それより以前からはじまっていたというのが、学習指導要領の中で言われています。

次の資料を開けてみてください。

これは世代交代の問題を書いていますけども、これちょっと飛ばしますんで、後でもう一回戻ってもらいますから。

4を開けてみてください。ここの教育内容の現代化部分で、この最初の2年間は、要するに進学は本当に大学いくことが何だみたいで、四当五落と言われた時代です。要するに4時間寝るんやったら大学には入れるけど、5時間寝たんだったらもう無理だと。それだけ厳しかったわけです。だから私もこの世代のちょうど終わりの世代になります。このころの中学校では、成績が出たら本当にもう、その成績を全部職員室の前に張り出してました。1番から50番まで。そしたら200人の学校だとしたら、あと150人どないなっとんやって。おかしいやないかそんなの。そいつらだけなんで全部張り出すんやと。全部張り出すことは、おまえ1番どべやって言われますんで、張り出しはせんけども、そういう時代だったんです。また、このときにちょうどロシアが、昔のソ連がロケットをうち上げて、スプートニクショックがあった頃で、そこで、科学をしっかりとやらなきゃいけないということで、こういうふうになったわけです。ところが、そういうふうな負担がすごい増えることがおかしいじゃないかと言って、1987年からゆとり世代に。でも実際は本当のゆとり世代は平成に入ってからです。寺脇研さんが言ったゆとり世代ですけども、その意味で授業の時間数を減らしていってますんで、そういう意味では一つのゆとり世代かなと、そういうふうに思ってます。その後ずっとゆとり世代があって、そのときに新たに生活科の新設がなされたりだとか、総合的な学習の時間が新設されたりというのがあります。これはなぜかという、要するに知識ばかりつけていたらだめでしょって。本当に実際に体験したことがないとだめでしょということ言ってるわけです。それはどういう

ことかという、兵庫県には二人のすごい人がおまして、一人は河合雅雄さん、もう一人は河合隼雄さん。隼雄さんのほうは文化庁の長官になりましたけども、その隼雄、雅雄さんがいる時に言われたことで、例えば鶏の絵を書いてごらんと言ったら、足が4本あったりだとか、ジャガイモはどこになってるとか、ジャガイモはどうなってるとか言ったら木になってたりだとか。全然分かってないわけです。知識としてはジャガイモって知ってるんですけど、それがどうなってるか、どういうふうになっていくのかは全く分からない。だからそこで実際に自然に触れているいろんなことを経験しないとイケないということで、兵庫県は自然学校を作ったわけです。そのときに河合雅雄さんが体験の大切さを言ったわけです。

その後、今度はいじめだとかいろんな問題が起こって言われたのが、特に神戸の事件が起こったときに言われたんです。その前に兵庫県の二つの大きな事件がありました。一つは、ある高校で子供たちが夜たむろしてて、けんかになって、一人殺されて、それが田んぼの溝のところへ流されていったという事件がありました。そのときに、子供たちの中で、何でこんなことが起こるんだっていうんで、「生きる力」という言葉が出てきます。それは河合隼雄さんが最初に言った言葉です。そのときに、「生きる力」を付けなきゃいけないんじゃないかって言ってるわけ。その後、今度は別なところでペーロン祭で、先輩が後輩を殺害したという事件が起こります。それから2カ月もたたないうちに神戸の事件が起こるわけです。そしたら、そのペーロン祭りのほうが注目されなくなってしまいます。神戸の事件が起こったときに、やっぱり「生きる力」の大切さだということが出てきます。そのときに河合隼雄さんと梶田勲一さんの二人の先生が中心になって、その事件のあとを受けてどういうふうに変えていくんだということで、トライやるウィークが出てきたわけです。それはどういうことかという、中学校2年生のときに、将来の夢を持って自分たちがどう生きていくかを考えなきゃいけないんじゃないかと。そのためには、小中学校にそういうふうなチャンスを与えるべきだと。ですから自分の将来のことを考える、そういう機会を、

1週間ぐらいどっかへ、いろんなところへ行ってやるのが大切じゃないかということでトライやるウィークを作ったわけです。そのときも私関わってましたんでいろんなところに説明を行ったの記憶がありますけども、そういうふうなことをやったわけです。そのときに「生きる力」というのと、「教と育」というのが出てきます。教えるだけでなくて育てるんだと。だから教育の意味は教えるだけじゃないんですよということを言われた。それともう一つあったのは、情報の光と影というのが出てきます。要するにもう既にそのときコンピュータがかなり使われてましたんで、コンピュータを使うことによって、ただ単に情報を得るだけじゃなくて、その情報をどう解釈する、うそだってあるでしょ。最近もう本当にいろんな情報が飛んできますけど、本当にうそか本当か分からない情報があります。時々何か違う、自分の携帯にも入ってきますけど、電話も入ってきて、おかしな情報があるなということになります。そのことを受けて、こういうそれぞれの世代が、ここが関わってきてるんです。このデジタル社会の子供たちとミレニアル世代が全部こういうふうに関係しているわけです。ですからその世代に応じてどういうふうに対応するかということなんですけども、そういうことよりも、もうこれから先、本当に一番大事なことは、いろんなことがあったけれども、最終的には自分で考えて、自分で判断して、主体的に行動できる、いい悪いの判断ができないとだめでしょということを言っているわけです。ですからそのことを今やってるわけなんですけども、なかなか世の中そんなことを言うといろんな事件が起こってるんで、あんまり言えませんけども。もう時間がないので飛ばしていきますけども。

じゃあ最後のところ。教育改革が行われます。その中で大きく3つの学改のうちの1番目の教育改革「46答申」というのがあります。これは大分前に行われたんですけど、この46答申は非常に大きな意味を持っています。どういうことかということ、ここで初めてさっき言った義務教育の小学校、中学校、そして高等学校、さらには大学の改革をどうするかっていうことをやったわけなんですけども、高校なら高校で、今の

高校のシステムを変えなさいということをもう既に言ってるわけです。一番大きかったのは、要するに特別支援教育をどうするかというので、この46のときに初めて特別支援学級、養護学校を作りなさいと答申されます。要するに知的の分を作りなさいというふうに言ってます。それはなぜかというと、視覚だとか聴覚だとか肢体の学校はもう明治の頃からありました。全部の都道府県にあったわけではありませんが、特に早かったのは京都です。京都が一番最初から視覚、聴覚だとか、それから肢体の部分の学校を作っていました。それ以外のところ、西宮でも肢体の学校は、義務教育がはじまった頃からもう作り始めていました。そんな中知的の部分がなかったんです。知的の部分なかった、じゃあ子供どうするかというと、就学猶予免除というのがあって、それを出せば学校に行かなくてもいいというのがあります。それは行かなくていいんじゃないかって、行けないから行かさないんだというのが主だったわけ。それじゃだめでしょうっていうんで、そのとき46協定のときに、そうじゃなくて、養護学校を作りなさい、知的な養護学校作りなさいと言ったわけです。それが昭和54年に実現しました。初めてそこで、知的も含めて全部をやってきたわけです。それが平成18年になったときに、その部分が今度はさらに特別支援学校と変わるわけ。そのときに何でそんなことになったかということ、そこに発達障害が入ったわけです。今までと違って発達障害の子供もどうするかというんで対応したわけです。世界で言われてるみたいに、じゃあインクルーシブ教育をどうするかというふうになるわけですけども、そういうふうに施設に全部を、通常の学級に全部入れてしまってというのはなかなか難しく、それだけの先生を付けなきゃいけないんで、国のほうはなかなか難しいだろうというんで、私も平成18年のときに文部省のほうに呼び出されて、全体の話聞かせていただきました。そのときにどうするかというんで、インクルーシブとして協働と交流はしないといけません。ただ、それとは別に、いろんな勉強もしっかり、勉強というか、自立するために何かの技術だとかいろんなものを付けなきゃいけないでしょうということで、その部分を分けてやろうというわけです。ですから今回、昨年

文部省から通知が出てますけど、午前中はきちんといろんなことやってごらん。午後からは交流をしっかりとやりなさいという形が出てますけども、本来であれば外国みたいにやればいいのかと思ってますけども、ただ、私もドイツだとかアメリカへの研修で行かせていただきまして、特別支援学校だとか、通常の学校、小学校から高校まで見せていただきましたけども、その中でいったらやっぱりシステムが違うんですね。日本の教育は学級があって、そこに先生が来て、授業が終わったら先生と一緒に帰って、そこでみんながいろんな話をしたり、また学級としての活動があるわけです。アメリカとかヨーロッパの場合は、先生が教室に自分の部屋を持ってて、子供たちがそこに来て、英語なら英語の授業を受けて、終わったら休憩は生徒が集まる教室に集まっていきます。そこには先生が誰もいないわけです。授業が終わったらさっさと帰る。午後はどうするかというと、体育の授業はあるんですけども、それ以外のスポーツなんかは全部地域。だから今回国が言ってる土日の部活動の地域移行は、ヨーロッパとかアメリカなんかではすでにすべての日で行われています。ですから極端に言えば、もう午後から弁当持ってきたり、家で食事してからまた出てくるとかいう子供もいるわけです。それも許されてるわけです。ただ、びっくりしたのは、時間が、例えば8時に学校が始まるとしたら、8時きっかりに来なかったら学校には入れません。もうきちっと門閉めてしまうんです。それで起こったのが、兵庫県で起こったのは――の（その後、高塚高校に訂正）門扉の問題です。時間になったら閉めるぞってまわりの様子を見ずにガチャンとやったんで、生徒が亡くなってしまったという。ですから遅刻をしないというシステムの本当の意味がきちんとなっていなかったんで、そういう事件が起こってしまったわけです。もう一つ先ほど言った、こういうふうな問題があるのと、先ほど言った、時代のギャップの問題をどうするかというのが今大きな課題になってます。これで2020年の教育改革ではそのことにもかなり触れてきてます。どうするかというと、やっぱりギャップがあるんです。今の先生たちが、子供のときどうだったかということは、今の子どもたちとやっぱり違ってきて

るわけです。同じように先生もまた、今20代の先生と40代の先生も違うわけです。それは当然教え方が違うわけです。それはそういうギャップの中で育ってきたわけですから、自分たちのときにはコンピュータもほとんどなかった、使ったことのないのに、じゃあ授業で使いなさいと言われたときに困るわけです。ですから今回市会答弁のときで、それぞれの授業についてですけども、コンピュータの使い方が若い人と違いますよというのはそこなんです。じゃあそうになったらじゃあ研修をすればいいじゃないかという形になるわけですけども、じゃあ研修したらすぐできますかっていったらなかなかそうはいかないですね。さらにもう一つの問題は、それに今AIが入ってきてますんで、そのAIにどう対応するかっていうのがあります。ですからコンピュータやAIをうまく使えばうまくできるでしょうし、使えなければなかなか難しい問題があるのかなというようなことを思っています。

もう時間があれなんで、本当はもっともっとたくさんしゃべりたかったんですけども、最終的には、今回の2024年の教育の大きな問題の1つ目として高等学校教育をどうするかという問題があります。普通高校をそれぞれ特色のある学校のやり方にしなさいということで、市西も市東もそれぞれ特色を出すように。特に市東については、理科系のものと文化系のものと一緒にやるという、本当にある意味で兵庫県でも唯一の学校になってます。市西のほうは理科系でやってますけども、そういう意味では大きく違うのかなということを思ってます。それから授業のあり方も、主体的・対話的で深い学びを受けて、協働的な学びや個性的な学び、それからインターネットを使ってといいますけども、授業のあり方というか考え方を変えていかなきゃいけないような授業になってる。ですから先生もただ単に教えるだけじゃなくて、導入の部分でどういうふうに考えたらいいんだろうかというんで、まずテーマを与えて、そこで自分で調べて、その中からみんなて話合って、ある結論を出す。その結論が正しいのか正しくないのかというのを、逆にAIに判断してもらったらいいと思うんです。AIが判断したのを今度はみんなて、いや、それAIが間違えてるでというふうにや

るぐらいのことをやれば、すばらしい授業が展開されるから、そのことによって子供たちはいろんなことを考えたり、いろいろことにテーマをやっていくという。2つ目としてもう一つ大きく変わってきたのはギフテッド教育で、それぞれの子供の才能を伸ばしてやるっていうことを言ってるわけです。特に一番大きいのは、特別支援の子供たちも、いろんな才能を持ってるんです、それを早く見つける。ですからある意味で、絵を書くのが得意だったり、いやいやいろんなものを作るのが得意だったりとか、いろいろあるわけです。それを早く見つけてやってその部分をしっかり伸ばしてやると、そのことで、これから自立して社会に出ていくときに、子供たちがいろんなことができるわけです。最近西宮でも、使えなくなったコンピュータのある部分を外して、そこから金の部分を取るという作業をさせてますけど、本当に西宮でもそういう工場ができていくということで、非常にありがたいと思ってます。その工場に特別支援の人たちが就職してやっているというのがニュースでありましたが、そういう意味で、ただ単に何か教えるとかなんかじゃなくて、子供たちにもいろいろな知恵を付けたら、いろんなことをやらせるってことが大切なんで、そこがこれからの大きな課題かなというふうなことを思っています。ですからこれから人生をどういうふうに生きていくか。何ができるようになるのか。そのためにどんな学びをしなきゃいけないのか。そしてどのようにやる必要があるのかということになると、これから一番大きいのは、先生自体も学び続けなければいけないし、逆に言えば、教育行政の私たちもいろんなことをやっぱり学んでいかなければならない。世の中がどう変わっていても、それに対してどう対応しなきゃいけないのかということが非常に大きな問題になります。ただ、大きな問題はそう言ったってそこに予算がついてくるんで、なかなか難しいことがあるわけです。ですから本当は文部省の下に中央審議会があって、中央審議会がいろいろ考えてるわけですが、それが途中から、必要な財政的な問題があるとかいろんなことがあって、総理大臣の下に臨教審がつくられたわけです。臨教審のほうがついたもので、そのことによって中央審議会はその臨教審を受けてさら

にやらなきゃいけないということになってしまって、基本はもう臨教審が決めてしまう。その後に国民会議があって、さらに今回の、安倍さんのときに出てきたのは、教育再生会議です。再生会議ってことは、教育の在り方が、非常に困っているということでしょうが。再生会議。さらに再生実行会議となってます。今の岸田さんのところでも、未来志向のものがあるんですけど、実際にはほとんど動いていないんで。今回、中央審議会の2024年の分については、文部大臣から直接下りて、その部分についてのいろんなことをやっています。働き方改革も入ってます。ですからそれを受けて、今後どれをどう実践するかということと、先ほど言ったように、今の学習指導要領でしっかりやらなければいけません、2027年にさらに変わっていきます。そこにどう時代の中で対応していくかということ是非常に難しいかなということも思っています。そういう意味から、西宮の教育についてもいろんなことを、体験活動としてやっていますが、甲子園球場でのああいうことをやってるのも非常に大きなことでして、ただ単に、知識理解だけで塾行けばいいんじゃないかではないんですね。ですからそこをどう先生たちが理解してもらってやっていくかということが非常に大切になるんじゃないかなというふうに思っています。ですから今回次の教育長に文部省から来ていただきますけど、本当に答弁を聞いてて、非常に学習指導要領にのっとったきちっとした考え方を持ってますんで、非常に私も、跡を譲るという言い方変ですけども、本当によかったかなというふうに思っています。ですからそういう意味で、これから本当に教育委員会が主役じゃなくて、先生が主役であり、子供たちが主役になるような、そういう学校であってほしいなというのを願って、私の挨拶に代えさせて頂いて。本当しゃべりたかったことの半分ぐらいしかしゃべっていませんけども、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

○石井市長　　こういう趣旨ですから教育長そこ座っておいてください。

それで、マイクは何本あるんですか。

○事務局　　3本。

○石井市長　　そうですか。じゃあ山本さんから教育委員会、教育委員さん4人ですね。質問ないし、質問でなくてもですね、重松教育長に対してのメッセージ、4人ばあっと言っていていただいて、その段階でまたちょっと教育長から返していただければと思います。

　　じゃあ山本教育委員からよろしく願いいたします。

○山本教育委員　　じゃあトップバッターということで。

　　7年間本当にありがとうございました。教育長、本当に本をたくさん読まれておりまして、たくさんのことを学ばせていただきました。今日はたくさん話があったわけですが、特にそこに書いてある第5の教育改革ですね。2020年の教育改革のことについて感じてることだけ話させていただきます。

　　私も40年ほど教員生活をしてきましたけれども、今回の改革が一番大きいということとは実感しています。なんか怖くなるような感じも正直しました。それはどういうことかといいますと、学びの考え方を本当にもう一回見直しをさせられたということと、それから学校ということのありようについて考えさせられたという点で非常に衝撃的でした。ですということですね、まだ進行形ですから。その中で今日教育長は最初に話の冒頭にですね、二つのキーワードを私は感じました。これだというふうに感じたんですが、教育を考える視点として、学びということとマネジメント、ということの二つの話をされました。学習指導要領は学びのことをずっと書いてると。ところがもう一方ではマネジメントがすごく大切なんだけど、そのことも学習指導要領には書かれてるんですけど、そんなに触れられてないと。私もそのところは非常にポイントだと思ってます。学校現場っていうのは学習指導要領に沿って、学びをどう変えるか、授業をどうするかということに当然一生懸命になるわけですけども、それも含めた学校のあり方、学校のマネジメントをどうするかということが物すごく大切だというふうな気がしています。教育長は何回か前の教育委員会の会議でも、学校のあり方が問われているということをおっしゃってましたけれども、まさにその部分が

学校に問われてるんだと。言葉を変えると、今回の教育改革を実施するにはその部分まで視野を広げないと、授業を含めた学校のあり方を変えないと、なかなか教育改革にはつながらないんじゃないかというようなことを感じています。

時間がなくなったらいけませんのでそのあたりですかね。それについて教育長はどう考えられてらっしゃるんでしょうか。聞いてもいいんですかね。

○石井市長　いいんですけれど、お尻がありますので、ぱっといってぱっとお願いいたします。4人いったところで教育長がお話しいただきます。

○長岡教育委員　教育長どうもありがとうございました。大学の講義のようになるかもっていうふうに冒頭におっしゃいましたけれども、まさに大学の最終講義を聞いているようなつもりで聞いておりました。

先生、いつもいろんなところでお話をさせていただく中で、私は、もちろんそのものもそうなんですが、自分の専門分野に置き換えながら考えることが多いんですけれども、今先生のお話の中にも運動部活動の話がありましたが、今の学校の運動部活動とそれから地域移行、それを地域移行するという、この課題については、国の政策として進められているのですけれども、この地域移行ありきで進められているきらいがあるというふうに私自身は感じていて、理論的な議論っていうのが十分展開されてないなっていうふうに感じています。先生が今のお話を聞いて、一体何を身に付けさせるのか。子供たちの健康とかスポーツ活動について、どういう資質とか能力を身に付けさせなくてはいけないのかっていうことを、学校にせよ、地域にせよ、どのような形であっても、そこの部分の議論を十分していくことが必要なんだなっていうことを、先生のお話を聞いて感じました。それから子供たちのスポーツ実施はもちろんなんですけれども、子供たちのスポーツ実施のみならず、指導者とか、それから大人とか、いろんなスタッフがそこに関わっていくと思うんですけれども、そういう人たちの資質や能力も高めていかないと、子供たちのそういった力っていうのは育めないんだなということを感じながら、先生よくリテラシーという言葉が使われるんですが、スポ

ーツにもきっとスポーツリテラシーとか、これからはフィジカルリテラシーっていうような言葉も出てくると思うんですが、そういった力を先生の今お話をされたようなことをベースにしながら、これからも考えていきたいなというふうに思いました。どうもありがとうございました。

○石井市長 側垣委員、お願いいたします。

○側垣教育委員 はい。教育長本当に7年間お疲れさまでした。私もうちちょっと一緒に仕事ができると思ってたんですが、突然3月、目の前から去られて、非常に寂しいこともありますし、残念ですけれども。本当に一緒に仕事をさせていただいて、様々なことを教えていただいたこと、感謝いたします。私の専門分野は養育という、教育も関連してるんですけども、様々な育ちをしている子供たちと直接関わる仕事の中で、やはり教育の分野でどのように考えて取組んでいくのかということ、様々な形で教えていただいたような気がします。私の立場から言うと、特に就学前の子供たちに関わることもこれまで多くて、そこでどういう子供たちの育ちを保障していくのかということ、常々考えているわけなんですけど、最近、いわゆる教育の中でも非認知能力をいかに大切に育てていくかということが言われるんですけど、まさに就学前の子供たちがそこにベースがあると。ですから様々な経験と様々な体験と、それから様々な人間関係、幼児期の人間関係をいかに保障していくか。それが小学校以降の教育につながっていくんだっていうことを改めてしみじみと感じます。教育長と私は同じ年なので、社会の流れも成長の中で同じように感じてきましたので、そうだったなというふうなこともあるんだと考えながら聞かせていただきました。

私たち教育に関わるもの全て、子供たちに関わるもの全てに、非常に大きなのは、昨年の4月から改革がありました。こども基本法ですね。それからこども家庭庁ができて、こども基本法の中に、子供の定義が年齢ではないと。つまり成長発達の段階にある人たちは全てそこに含まれるんだという。その中で私たちは子供たちの発達成長をどう保障していくかという事。また改めてですね、20歳を過ぎても成長発達を保

障していく、サポートしていかないといけないというふうなことが言われているんですが、その辺りも含めて、今後の私自身の働き方、あるいは私たちの考え方、大人の成長の考え方について、本当にたくさんの方のアドバイスをいただきました。またこれからも立場を離れられても、ぜひお付き合いしていただきたいなというふうに思っています。よろしくお願いいたします。

○石井市長 藤原さん。

○藤原教育委員 はい。教育長、これまでありがとうございました

山本委員も御指摘あったように、とにかく教育長と言いますと博覧強記でありまして、たくさんの方の本を読まれて、それで勉強させていただいたということがございます。ただ、今日の講義の中で一点だけ、例の校門圧死事件があった高校名なんですけれども、ちょっと別の名前を指摘しておられたので、もしもこれアーカイブになるのであれば、そこはちょっと訂正されたほうが。といいますのは、あれで亡くなった女子生徒っていうのは私同い年でありまして、非常に当時インパクトがある、ショッキングな事件だったので、高校名も含めてすごい記憶しているということがございます。その点はさておき、これまで各世代を、文字どおり横断されてきた、教育の世界において横断されてきた教育長ということであろうかと思えます。この各世代のなんですけれどもね、これ名称は共通することは恐らく、それぞれの該当世代が自分で名乗ったものではなくて、全部上の世代が名前を付けたんだろうというふうに思います。すなわちいつの世においても、若者っていうのは上の世代から見たらモンスターに過ぎないっていう形で、モンスターに見えてしまうってことなんです。何かよく分からんぐらいあいつは何者だということで、何か世代の名前を付けてきた。それが今に至る。自分も付けられて今に至るっていうことになろうかと思えます。ちなみに私は団塊ジュニア世代でございます。そういった中で、今自分たち大人にとって欠けている足りないものっていうのを、何とか子供で補おうというのが教育というもののあり方の変遷なのかなというふうに理解しております。そうしたときに、今度は2020年

の教育改革、主体的・対話的・深い学びということが言われますけれども、これはつまり、一番欠けてるのは誰なのかっていうと、子供じゃなくて我々なんです。我々にこれが欠けてるんです。だからなんか下の世代に身に付けさせようというふうにしていくわけなんです。そのことを今後も肝に銘じて、大きな流れは、これ自体は変わらないと思いますので、我々も主体的・対話的・深い学びというものを継続していきたいと。今日の御講義を受けて改めて感じました。以上です。

○石井市長　　はい。ここまでありがとうございます。山本さんから学級経営のことでもございました。あと今の藤原さんの御指摘ですね、今ちょっとアーカイブもございます。高校名は今調べました。高塚高校ですね。そういうようなことでしたので、記録としてよろしく願いいたします。

じゃあちょっと教育長、よろしくお願いします。

○重松教育長　　マネジメントの分ですけど、一つ目、言い方がいいか悪いか知りませんが、一つは東京の麹町中学のやり方みたいなものもありますね。要するにチームとしてやる、学年の枠を外してしまうというやり方もあるし、それから京都の何高校かな、もやってる、要するに授業の枠の外し方の問題もあるし。ですから通常なら普通授業して、はい、で終わりですけど、要するに授業をやったときにレポート出させ、そのレポートを添削してまた返す。そのレポートはただ単に、要するにAがあったらA+BはCになるっていう答えを聞いているわけじゃなくて、こういう問題に対してはどういうふうにあなたは対応しますかということ聞いているわけですよ。そういうことをやることによって、それを今度はみんなの前で発表させるということをやればできるわけで。ですから今までみたいに先生が教えて、はい、答え出して、はい、次という授業じゃなくて、授業のあり方を大きく変えてやらないかなのかなというふうに思ってるし、先ほど言ったように、子供たちを見るのに、チーム学校として、それから学級の枠を外してしまえば、その学年はその学年で全部というふうになりますけれども。だから、そうするためには、要するに先生たちの、共同体ができる

ような話にしてやらないと、ただ単に、枠を外したらいけますよとはいけないんで。そのためにじゃあどうするかというのは、中心になる学年主任の先生が話をしながら、お互いで交流しながら、どうするかっていうのをやっていかなきゃいけないのかなというふうに思ってます。ですからシステム的なもののマネジメント。それから教育課程のあり方もちょっと考えなきゃいけないかなというふうに思っています。ですから授業時数は基本的には決まっていますけど、全部が入るわけじゃない。入るっていうか、時間を使ってるわけじゃないんで、もし台風が起こったときや何か起こったときの余裕の時間があるんで、それをどうするかという。それから学校行事をどういうふうにやっていくかというのも非常に大事かなというふうに思ってます。ただ単に運動会やったらいいし。だから今回のコロナのときに、運動会のあり方を大分変えたと思うんですよ。それもそれで一つのやり方かなと。それから卒業式だとか入学式も変えたはずなんです。ただ、保護者からね、何でやとかありましたけど。二人で行きたいのに、何で一人しかいかんのやってあるけど、その代わりに今度はビデオでとか、そういう映像を使って見てもらうということもできますんで、それも一つの方法かなと。ですから、いろんなことが起こることによっていろいろ変えていったはずなんで、その変えたことを今度は成果として、次へつないでいけばいいのかなというのは一つ思いました。

まあちょっと答えになっているかあれですけど、それは一つね。

それとやっぱり世代世代の部分がなかなか難しいのかなって。今みたいに少子化になってますんで、今までですとピラミッド型でしたけど、上が少なくて下が多かったんで、上からこういけば下りてましたけど、今度は今逆になってますんで、上が多くて下なんで、上から言われたら下はたまったもんじゃない。だから今度は下から突き上げて、となってくるんで。だからそういうことがやっぱり世代間の交流というか、世代間で十分に話し合いをするだとか、いろんなことが非常に大事になるのかなと。お互いの考え方を理解するという。でないと上からトップダウンというやり方はなかなか

か今難しくなってきたのかなと思います。それが先ほど言ったように就職も永遠に、その会社に入ったら定年退職までおるというんじゃないくて、途中でころころっと代わっても、自分の専門は、例えば建築なら建築のところで関わってくる。だからこういうことをやりたいんで、違うこっちの会社でいくということも、十分今できるようになってますんで、そういう意味では大事かなというようにことを思っています。

それから、やっぱり大事なのは非認知能力かなというふうに思います。非認知能力をどう付けるかという。ですからそれは逆に言えば、いろんな議論がってますけど、やっぱり遊びをとおして、子供たちがその非認知能力を付けることが大事であって、その中で集団としてコミュニケーションを取りながら子どもが育つことが大切になります。今働き方改革に出てるように、保育所の子供とか認定こども園に子供を預けてっていうのは、うまくいけばとってもいい。そのかわり、逆に間違えばそこへ全部任せてしまうと、今度は親子のつながりが全然なくなってしまうんで、そこはやっぱり血のつながりなんか親子ってのは非常に大事なんで。ですから保育所で帰ってきたら、今日はどうだったとか言って話を聞いてやるとか、それとか食事をしながら何とかっていうのは非常に大事かなと。それはもう最初、今回のよりもずっと前から、お父さんは仕事で忙しくて、すぐに家に帰ってこない。もう夕方子供が寝る頃しか帰ってこないんで、もうほとんど話すことがない。何かあったら土曜日曜に遊んでくれるんだけど、なんか遊んでくれてるのか、自分がやりたいことを勝手にやるんか、よう分からんなというようにことを言う子供もいます。ですからやっぱり親子のつながりってのは非常に大事なんで、ただ、テレビを見ながら、うん、そうだよねじゃなくて、やっぱり本当に会話をして、今日こんなことあった、でもそんなときこうしたらよかったんかなとかいう指導助言もしてあげたらいいし、逆に子供のほうから、そんなこともお母さん知らんのって言われることによってまた、世代間交流もできますんで、それは非常に大事だなと思ってます。ただ、国なんかはね、よく家庭の教育力が低下している。地域の何々がって言われますけど、現場に直接近い市教委

としては、西宮のそんな地域の教育力が…などと簡単には言えないんで。このことについては、なかなか難しい面がありますけども。やっぱり弱くなってることは事実だと思います。だからやっぱり世の中の時間の流れに合わせてどうするかっていうのが一番大きな問題だなと思ってます。私からは以上です。

○石井市長　　ちょっと時間が限られてますけれども、ちょっとそれでごめんなさい、次長さんちょっとごめんなさい。はパスして、最後に市長部局から一言ずつ、政策局長と岩崎、北田副市長から、一言どうしても聞きたいことがあれば。

○清水政策局長　　教育長、本当ありがとうございました。本当に教育という言葉は随分聞き慣れた言葉のはずなのに、やっぱり改めて多くの深い言葉だなということを感じさせていただきました。本当にありがとうございました。そしてお疲れさまでした。

○岩崎副市長　　本当に、教育長、ありがとうございました。特に僕も勉強させていただいたなということで、もともと量的な拡大とか均質的な教育というところから始まって、質的な拡大であるとか、多様性とか、これから情報化、ITですね。そしてコミュニケーションとか、学校を運営していかなければいけないというマネジメント能力とかですね、すごくこれから大切にしていけないといけないっていうところをすごく的確にですね、教えていただけたかなと思いました。本当にありがとうございました。お疲れさまでした。

○北田副市長　　では、私から一言感想と感謝を述べさせていただきたいと思えます。重松教育長、本当に7年間お世話になりました。ありがとうございました。

よく教育長から、先ほどのお話の中で出てきました学級経営の大切さみたいなのをよく伺いすることがありました。私自身も小学校、中学校、高校、大学、それぞれ恩師がいるんだけど、結局振り返ってみたら、知識を教えてもらったというよりも、授業の端々で人としてどう生きるかみたいなのを、いろんな言葉でかけていただいた。それを何とかそしゃくして、今までやってこれたかなっていうふうに思っ

る。そのときはやっぱり、きっと先生方にもゆとりもあったんじゃないかなと思ってまして。そういう意味では、今日ゆとり教育の話もありましたけど、子供に対するゆとりも大事なんだけど、学校現場の教師の先生方に対するゆとり、特に時間的ゆとりであったり心のゆとりであったりってのは非常に大事なのかなと思いました。そういう意味で言うと、重松教育長とは確か教育大綱の見直し作業の中で、まさにこの総合教育会議を介して、いろんなことを教えていただき、3年前でしたか、改定をさせていただいた。これまさに市長部局と教育委員会の合同作業でさせていただいたということで、これ非常に大切な作業だったと私は思ってまして。そういう意味でいうたら、先ほど長岡委員のほうからもおっしゃっていただいた部活動の地域移行なんかの話もですね、これからまさに教育委員会と市長部局が力を合わせて組織的に対応していくべきことだと思いますんで、その点も重松教育長の教えを改めて心の中にとどめながら、これから進めさせていただきたいと思います。本当に7年間、どうもありがとうございました。

○石井市長　はい、ありがとうございました。

それでは、会議終了の時刻近づいてまいりまして、最後に教育長から一言お願いしたいんですけれども。まずその前に私からも簡単に。

本当に教育長、ありがとうございました。特にコロナの3年間というのは、私自身も教育長にとっても初めてのことでありましたが、一方で教育委員会、現場に対してしっかりとグリップをしていただいた、そのことが大変私も心強くありがたかったと思います。

そして最後に教育長から一言お願いいたしてくださいけれども、一つちょっと質問させていただきたいのが、教育者として歩んできた中で、さっき平木小学校で職員会すっぽかしてサッカーしてたとか、あんな話をもっといっぱいしていただきたいんですけども、一番うれしかったこととか、一番印象的、何十年も子供と向き合って、ないし教育行政向き合って印象的だったこと、これ一つか二つか、ちょっと具体的に。

一番うれしかったことをちょっと聞かせてもらったらどうかなと思うんです。そうしたことも含めて、ちょっと最後に一言よろしく願いできますでしょうか。

○重松教育長　私は教員としては15年間しかしてませんので、あとはもう本当に行政に関わった仕事でしたけども、一番やっぱり覚えているのは鳴尾北小学校の1年生を持って、普通5年生か6年生持ったら、大体卒業したら何かのときに同窓会したりなんだからするんですけど、ちょうどそれで鳴尾高校に戻ったときに、1年生のときに教えた子供が親になって、学校に来て、先生あのときあんなんやったなって言われたときが一番うれしかったです。やっぱり1年生のときのことを覚えている。先生にこんなこと言われた、え、そんなこと言ったんかなって言うたら、先生ぼけとん違うんかと。だからそれがやっぱりうれしかったですね。教育の一番うれしいのは、自分と子どもの教えとつながりというのが、非常に大事かなというのを感じました。

○石井市長　じゃあ最後のじゃあ。

ありがとうございました。じゃあちょっとそういうことで、最後のまとめの一言、今のいいですか。

本当に長年ありがとうございました。

本当にもう最後のクロージング。もう一回最後じゃあ一言いただいて締めたいと思います。よろしくお願いします。

○重松教育長　本当にコロナがある程度収まってこの3年、4年間のことが積み上がって行って、西宮の教育が本当にすばらしい教育になればいいなというふうに思ってますし。いろんな体験活動もきちんとやってもらってますんで、そういうものを本当にありがたいかなと思ってます。本当に教育長何と言っても、結局は教育委員会のスタッフが、やっぱり一生懸命やってもらった結果で、私一人がやったってできるわけじゃないんで。今回義務教育学校作ったときもみんな協力してやってもらえたんで非常によかったかなというふうに思ってます。さらなるこの西宮教育の充実のために、それぞれみんなが頑張っていて、お互いに、私もできる限りサポートができる限りは

していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。本当にありがとうございました。

○石井市長　ありがとうございました。

それでは、本日の総合教育会議を閉会いたします。ぜひ重松教育長に最後感謝の拍手を皆さんよろしくお願ひいたします。

以上で終わります。

閉会　午前 12 時 4 分